

【本稿について】

本資料は、2002-2003 年に雑誌『Anifa』へ寄稿した際の執筆元原稿を PDF 化したものです。出版社での編集・調整を経る前の原稿であるため、実際の掲載内容とは一部表記が異なる場合があります。また、内容は執筆当時の情報に基づいています。

動物実験 トイレタリー製品編

動物実験していない製品を選ぼう！毎日使う洗顔フォーム、シャンプー、リンス開発のため殺されている動物たち。

シャンプーやリンスの新成分開発の裏側で多くの動物たちが殺されています。シャンプーやリンスは法律上はファンデーション、おしろい、口紅と同じ「化粧品」です。製品開発のため、動物実験が行われ、たくさんの動物の命が奪われています。

動物愛護団体の運動により、動物実験の実態が研究室という密室から国民に知れるようになると、動物実験反対運動が起きました。日本ではまだまだ知られていない動物実験の現実、海外でのトイレタリー製品、化粧品のための動物実験削減はどのように進んできたのでしょうか。

■ 欧米では化粧品のための動物実験の削減に向けて動いている

'87 年 スイス政府は代替法研究のための部署をつくり、現在では化粧品完成品については動物実験を禁止しています。

'98 年 ドイツが「動物保護法」で化粧品、タバコ、洗剤のための動物実験を禁止。

'98 年 イギリスは国内における化粧品開発用動物実験を廃止しました。ただし輸入品について適応外です。

EU：

'93 年 欧州ではに EU 議会（欧州議会）で、化粧品における段階的な動物実験廃止に合意しました。

一番最近のニュースでは(2002.12.1 現在)、2002 年 11 月に開かれた欧州議会では 2009 年から化粧品開発の過程での動物実験を全面的に禁じるとの合意に達しています。化粧品

の開発、製造に動物実験を使った化粧品は、E U 域内への輸入と販売が一切禁止されます。

化粧品業界は 2009 年までに動物実験に代わる手段を確立しなくてはなりません。

今までは業界では「法律で義務付けられているから仕方なくやっていた実験」も、国民にはその残酷さのため認められず、法律で動物実験しない方法を見つけなくてはいけなくなりました。

今まで化粧品業界や利害がからむ団体などからの激しいロビー活動により、また WTO（世界貿易機構）から「円滑な貿易ができない」ことを理由に、化粧品のための動物実験禁止の実施は何度も延期されました。

このため、現状では、英国、オーストリア、オランダ、ドイツなどでは法律で化粧品の動物実験が禁止されていますが、禁止されていない国、例えばフランスやイタリアで実験され、その製品が輸入されて、禁止国で販売されています。

2009 年からは原則これが輸入と実験が禁止されることになっています。

■ 日本の場合

日本ではトイレタリー商品、化粧品のための動物実験を禁止するという動きはありません。今まで化粧品を製造する場合、特に「新成分」を配合する場合は、申請書類に安全性に関する資料として動物実験の結果を添付資料としてつけなくてはいけませんでした。

しかし平成 13 年 4 月 1 日以降薬事法が改正され、化粧品についての安全性は新成分についても、企業責任のもとに確認し、選択し配合できるようになりました。

しかしそれでもなお、多くの企業、多くは大手企業です。一は「安全性の確認」を理由に動物実験を続けています。

日本でも動物実験していないものは輸入されて販売されていたり、また製造しているメーカーもあります。

ぜひそれらのものをお使いになってほしいと思います。

■ どういう動物実験が行われているのか

<眼刺激性試験> 別名ドレイズテスト。世界的に批判が多く、特にヨーロッパやアメリカでは'80年代に強く糾弾されました。この世論が後押しして、世界規模で、動物を犠牲にしない代替法の研究開発の方向に向かったといえます。実はこの実験法は、大変残酷であるにもかかわらず、信頼性は低いといわれています。ウサギは涙が流れにくいので、この実験法に最もよく使われます。頭だけが出る拘束器に入れられ、まぶたをクリップで固定したウサギの目に濃縮した試験薬を点眼してゆき、眼が腐敗していく様子を観察することで刺激性を調べる試験です。

<皮膚刺激性試験> ウサギやモルモット、マウスなどの背中の毛を剃り、そこへ3日～2週間試験薬を塗り続けます。そして肌が赤く炎症していく様子など、化学物質の皮膚への影響を見る試験です。

<光毒性試験> モルモットやマウスなどの背中に試験薬を塗布し、太陽光線による化学物質の作用を調べます。塗布した部分はアルミホイルで覆われ、UVランプが照射され続けます。

<急性毒性試験> ラットやマウスなどを絶食させ、試験物質を強制的に投与し、致死量を調べます。以前は半数が死ぬまで実験を繰り返し行なっていましたが、最近では概略の致死量を求めればいいことになりましたが、やはりまだまだ半数致死量を出している企業もあるようです。

■ どうしたらいいの？

特に欧米ではうさぎの目の腐っていく様子を観察するドレイズテストが大変残酷であるとして、動物愛護団体から非難されました。これを世論が後押しして、動物実験に代わる方法、動物を犠牲にしない代替法の研究開発の流れが出来ました。

一人一人が出来ること、製造している企業や厚生労働省、日本化粧品工業連合会などへ代替法を研究してほしい、国で代替法研究する機関を作してほしい、動物実験しないで製造してほしい、という意見を届けたらり、実験していないメーカーのものを選ぶということが出来ると思います。